

藤原宮大極殿院の調査

飛鳥藤原第 186 次調査記者発表資料

2015 年 10 月 9 日 (金)

奈良文化財研究所 都城発掘調査部 (飛鳥・藤原地区)

*現地説明会を 10 月 12 日 (月・祝日) 13 時 30 分より実施します (小雨決行)。

*駐車場はありません。

所在地： 奈良県橿原市高殿町

調査面積： 1548 m² (うち 688 m²は昨年度調査と重複)

調査期間： 2015 年 4 月 2 日～継続中

【調査概要】 大極殿基壇南側の大極殿院内庭を調査し、礫敷広場、大極殿南面の階段痕跡のほか、造営期の運河、南北溝、斜行溝を検出した。さらに奈良時代およびそれ以降の掘立柱建物 6 棟を検出し、藤原宮造営期、藤原宮期、藤原宮廃絶後の土地利用の過程を知る重要な手がかりを得ることができた。

1. はじめに

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約 120m、南北約 170m の区画である。その中央には、即位や元日朝賀などの儀式の際に天皇が出御する大極殿があり、南側には正門である大極殿院南門が位置している。

大極殿院では、戦前に日本古文化研究所が、大極殿と大極殿院南門、大極殿院回廊において発掘調査をおこなっており、大極殿のほか、回廊や「西殿」・「東殿」の礎石位置と建物規模を推定している。奈良文化財研究所都城発掘調査部では、これまでに大極殿院の様相解明を目的として、大極殿北方 (第 20 次)、西門 (第 21 次)、東門および東面回廊 (第 117 次)、南門 (第 148 次)、南面回廊 (第 160 次) の調査を継続的におこない、主要な建物の配置と構造を明らかにしてきた。昨年度からは、大極殿院内庭の発掘調査に着手し (第 182 次)、朝堂院朝庭と同様に礫を敷いて整備されている状況を明らかにした。加えて、下層では藤原宮造営期の運河や溝、さらにさかのぼる時代の古墳、藤原宮廃絶後では、奈良・平安時代の掘立柱建物や溝、地鎮遺構、整地層の存在を明らかにした。

今年度は、引き続き大極殿院南門と大極殿基壇との間に位置する 1548 m²を発掘調査した。ただし、調査区南半の 688 m²は昨年度調査区北半と重複する。以下では、北半の新規調査部分を北区、南半を南区とよぶ。

2. 調査成果

1) 藤原宮期の遺構

大極殿院内庭 これまでの調査で、大極殿院内庭は礫敷の広場であったことが判明している。今回の調査では調査区東半で礫の遺存状況が良く、西半では一部を除いて礫が失われていることがわかった。礫は拳大で、整

地土の上に敷いている。概ね標高 71.2m前後で礫敷を検出しているが、北区北東部では 71.0m前後となる。昨年度に検出した礫敷の標高と顕著な高低差はないが、北区北東部ではやや低くなることが判明した。後述する運河と重なる部分は、埋め立て後に沈下しているため後世に削平されず、礫敷が残存している。なお、北区では、幢幡遺構などの儀式に関わる遺構を探すため、藤原宮中軸線を中心に幅 6.0mの範囲で整地土を除去して精査したが、遺構は確認できなかった。

大極殿南面中央階段 北区北西隅で、整地土上に薄く貼り付いた状態で、凝灰岩切石の底部を検出した。大極殿基壇南面の中央に取り付く階段の痕跡とみられる。凝灰岩の幅は最大で 1.1m程あり、地覆石、延石のいずれとみても一般的なものより大きい。階段の幅（東西の距離）は凝灰岩の内々で 5.2mを測る。階段の出（南北の距離）は、現状で 3.0m以上（南面外端までの距離）を測る。使用された凝灰岩は、二上山産出の白色角礫凝灰岩である。

なお、東側面の凝灰岩のさらに東側には、凝灰岩を据え付けた際の版築状の整地土がわずかに残存する。整地土の層理面には凝灰岩粉末が敷きこまれており、版築状に整地土を施す際に、湿気抜きを目的で散布されたものと推測される。

大極殿南面東階段 北区中央北端において、中央階段と同様に、凝灰岩切石の底部を検出した。大極殿基壇南面の東階段の痕跡とみられる。逆凸字形の平面形のうち、西側面と前面西半が残存するが、東半については東側面の一部が残存するのみである。階段の本来の幅は不明、出は南面外端までで 3.3mを測る。使用された凝灰岩は、中央階段同様、二上山産出の白色角礫凝灰岩である。

東階段の周囲には部分的に礫敷が残存する。礫敷の下には版築状に 2～3層の整地土を施しており、またその層理面には中央階段と同様に凝灰岩粉末が敷きこまれている。凝灰岩の下端面から礫敷上面までの標高差は 10～15cm程である。

2) 藤原宮造営期の遺構

運河 調査区中央部を南北に貫く幅 5.6mの素掘溝。南区において 14.0m検出した。宮の造営に際し、資材を運搬したもので、大極殿と南門の造営で埋められるが、礫敷敷設前には一時的に窪地になっていた状況が認められる。

南北溝 調査区東側の南端と北端で確認した幅 2.7mの南北方向の素掘溝。南側の朝堂院から続き、大極殿院南門を避けて東へと屈曲した後、再び北へと延びる。今回の調査では、調査区東半で北へさらに 18.0m延びることが判明した。

斜行溝 南区で検出した、調査区の南東から北西に延びる幅 1.0～1.5mの素掘溝。深さは検出面から 0.5m以上あり、南北溝から北西方向に分岐する。北西端は、運河埋め立て後の窪地に接続しており、その窪地と同じ土で埋められている。埋土は南北溝とも共通しており、同時併存したと考えられる。

3) 藤原宮廃絶後の遺構

建物 1 北区西寄りにある総柱の掘立柱建物で、桁行 2間以上、梁行 2間で東西棟とみられるが、西側の大部分は調査区外にある。柱間は桁行方向が 6尺に対し、梁行方向が 7尺とやや長い。柱穴は一辺 0.8～0.9m、深さ 0.4m以上の不整形。抜取穴はいずれも橙色の砂で埋められている。建物 3・5、塀 2と重複し、南側の柱穴 2基は建物 3の柱穴によって壊されている。今回検出した建物の中では最も古く位置づけられる。

建物2 調査区中央西寄りにある掘立柱建物で、南半を昨年度南区で検出しており、今回の調査で桁行2間以上、梁行2間で、南に廂の付く東西棟であることが判明した。柱間は桁行、梁行とも7尺等間。柱穴は一辺0.5～0.6mの方形。北側柱列の東から2基目には柱根が残る。建物3・5と重複し、建物3の南側柱列が北側柱列を壊して掘り込まれていることから、建物3よりも古い。

建物3 北区南西寄りにある東西棟の掘立柱建物。桁行3間以上、梁行2間で、柱間は桁行、梁行とも7尺等間。柱穴は直径0.4～0.5mの不整形。建物1・2・5と重複し、建物1・2の柱穴を壊して建てられており、それらよりも新しい建物。

建物4 北区中央南寄りにある南北棟の掘立柱建物。桁行3間、梁行2間で、柱間は桁行方向で7尺、梁行方向では5ないし6尺となる。柱穴は直径0.3～0.5mの円形ないし方形。建物5・6と重複し、建物5よりも古い。配置関係から建物3と同時期に建っていたと考えられる。

建物5 北区南西寄りにある東西棟の掘立柱建物。桁行4間以上、梁行2間で、南側と東側に廂が付く。柱間は桁行、梁行とも7尺等間。身舎部分の柱穴は大きく、直径0.3～0.5mの円形ないし隅丸方形で、深さは0.5m以上。廂部分の柱穴は小さく、0.2m～0.5mの円形ないし楕円形で、深さは0.5m以上。建物4よりも新しい。

建物6 調査区中央南西寄りにある南北棟の掘立柱建物。桁行5間、梁行2間。柱穴は小型で、直径0.2～0.3mの円形。柱間は桁行方向で7尺、梁行方向では8尺となる。南区で昨年度一部を検出しており、今回全容が明らかになった。柱穴内から黒色土器片が出土しており、平安時代に降る建物である。

塀1 建物5の1.8m北側で検出した小型の柱穴からなる東西塀。7尺等間で、建物5の北側柱列と柱位置が揃うことから、建物5の目隠塀とみられる。

塀2 建物5の東3.5mで検出した小型の柱穴からなる南北塀。6尺等間であるが、1間のみ4尺となる部分がある。塀1と柱穴の規模や形状が似ることから、建物5と同時期のものとみられる。

小溝群 幅0.4m前後の素掘溝群。耕作にともなう溝と考えられる。調査区西側では、南北方向の小溝の一部が上述の建物群に先行して掘り込まれている。調査区東側では内庭の礫敷を壊して南北方向に2時期分が掘り込まれており、埋土からは8世紀末頃の土器が出土した。

奈良時代整地層 北区から南区にまたがる帯状の整地層。整地層の厚さは約0.3m。昨年度の調査で奈良時代中頃の土器が多数出土している。

3. 出土遺物

古墳・飛鳥・奈良・平安時代の土器や、藤原宮期の瓦が多量に出土した。階段の周囲からは、前述の二上山産出の白色角礫凝灰岩のほかに、兵庫県加古川西岸産出の流紋岩質溶結凝灰岩（竜山石）が出土した。大極殿基壇の外装石には両者が組み合わされて使用されていたものとみられる。また、遺構には伴わないが、塀片が1点出土した。

4. まとめ

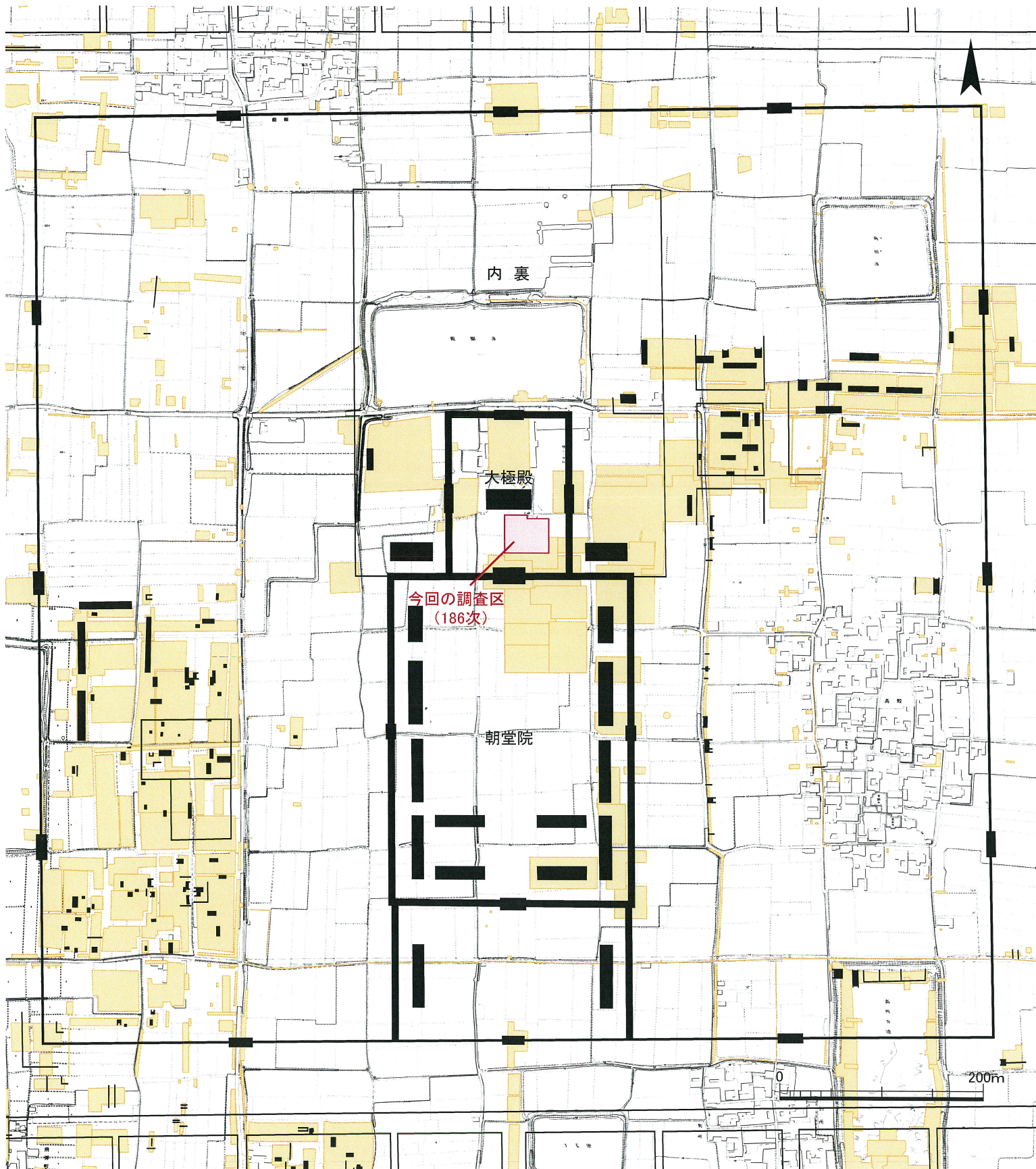
大極殿院内庭南側の様相が判明 今回の調査で、昨年度の調査区と合わせて、大極殿院南門基壇から大極殿基壇に至る内庭を南北に調査したことになる。礫敷の遺存状況が良好ではない部分もあるが、拳大の礫を敷き詰めて整備されていたことが再度確認できた。一方、藤原宮期の儀式に関わる明確な遺構は確認できなかった。

大極殿南面の階段の一部を確認 大極殿の南面階段の一部を検出した。かつて日本古文化研究所が北側隣接地

の調査をおこなっているが、その際には確認されていなかった大極殿院南面階段の痕跡を検出した。今回検出した階段は、現存する基壇の高まりの南端よりも5m程南に位置する。このため、基壇の南辺は大きく削平を受けているものと推測される。しかしながら、今回の調査で基壇周囲には、階段および当初の遺構面がかろうじて遺存している状況を確認できたことから、今後、精緻に調査を実施することによって、大極殿の構造の解明が進むものと期待できる。

大極殿院の造営過程 昨年度の調査で検出していた斜行溝は、調査区東側の南北溝と同時併存することが判明した。また、斜行溝は調査区中央の運河を埋め立てた後の窪地と一体で埋められる。運河は、埋め立ての最終段階で異なる種類の土を交互に積み重ね、版築状に丁寧な整地がなされている。運河埋め立て後、大極殿院内庭は最終的に礫敷広場となっている。

藤原宮廃絶後の土地利用が明らかに 今回の調査では、藤原宮廃絶後の掘立柱建物6棟や建物にともなう堀、小溝群、整地層などを検出した。藤原宮廃絶後には、奈良時代のうちに小溝群が掘り込まれており、この場所が急速に耕地化するとともに、調査区西側で奈良時代から平安時代にかけて、掘立柱建物が何度も建て替えられていることが明らかになった。これまでも、大極殿院や朝堂院では奈良時代以降の建物が多数見つかっており、今回の建物もそれらと関係するものとみられる。

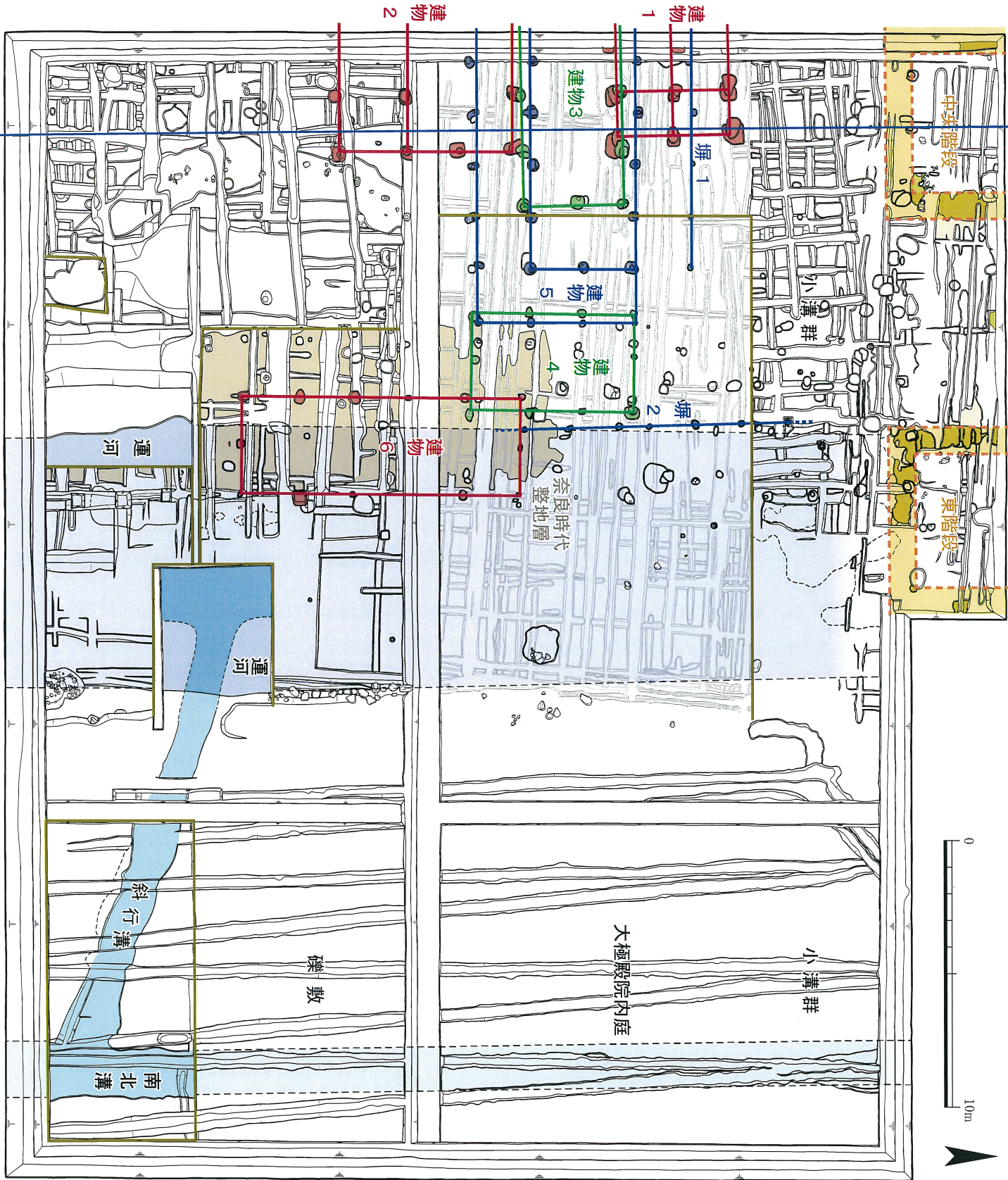
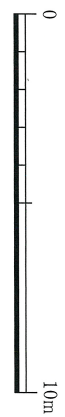


藤原宮全体図と第186次調査区の位置図

藤原宮中軸線

中葉階段

東階段



飛鳥藤原第186次調査区遺構平面図